

自ら問い、自ら導く学生たち

立川 皓太

(たちかわ・こうた)さん

歯学部
口腔保健学科3年
アメリカンフットボール部

●立川さんが歯科技工士という存在を知ったのは高校生の頃。「祖父が何度も入れ歯を作り直しており、歯科医院を変えたと入るびったりと合う入れ歯が完成してとても喜んでいました。歯科技工士という仕事に共感しました」。もともと、プラモデル作りなども好きで手先の細かな作業も得意だったことから、歯科技工士を志すようになった。



立川さんのオフenseラインというポジションは、基本的にボールに触ることはできない。オフenseでは、相手をブロックして、ボールを持った味方選手が走るための道(ライン)を開く。



「患者さんの笑顔のために
歯科技工の技術を磨いていきたい」

東京医科歯科大学アメリカンフットボール部「STONE」は2000年に創部した。2年前までは部員が11人に満たなかったため7人制リーグに参加していたが、現在ようやく部員が15人まで増加し、11人制リーグへ移行した。全員が未経験者だが、チームワークを大切にしたい強いチームを目指して日々練習に励んでいる。

アメリカンフットボールは、2チームが攻守を交替しながら得点を競い合う。オフense側は走ったり、パスしたりしてボールをつなぎながら敵陣のエンドゾーンを目指す。ディフェンス側はその攻撃に素早く反応してタックルなどで阻止していく。

歯学部口腔保健学科口腔保健工学専攻3年の立川皓太さんは、3年次の4月からキャプテンを務めており、自身はオフenseラインという相手の攻撃を阻止するポジションを務めている。

「私のポジションは、試合中

ボールに触ることはありません。しかし、少しでもボールが前に進むように相手チームをブロックする重要な役割を担っています。縁の下の力持ちのような存在に魅力を感じ自ら志願しました」

部活動は、土曜日ともなると練習は朝から夜まで続く。立川さんは、部員がケガをしないように気を配りつつ、練習メニューを組み立てている。STONEは、関東大

学学生アメリカンフットボール連盟の医科系リーグである医科歯科リーグに加盟しており、好成績をあげることが目下の目標だ。

学業面では2年次から専門教育が始まり実習も行われている。立川さんが特に興味を持っているのは顎顔面補綴だという。実習でも「顎補綴工学」があり、顎口腔、顔面の欠損に用いる補綴装置の構造と製作法を学んでいく。

「腫瘍や炎症、外傷、先天性の異常などにより顔面に欠損が生じた場合、入れ歯や補綴

装置で補うことで、食べ物や飲み込みやすくなる機能を回復させることができます。私が顎顔面補綴の装置を製作することで、患者さんの笑顔にできるお手伝いができればと考えるようになりました」

高齢者施設で体験した実習では、様々なバックグラウンドを持つ方々と接して、一人ひとりに合った補綴が重要だと学んだ。

「例えば、歯ぎしりが多い人に合う補綴装置など、患者さんごとの特徴やライフスタイルまで考慮して入れ歯を製作できる歯科技工士を目指す」と思いました」

そのためにも今後は実習に注力していきたいと目を輝かせている。

「4年次の卒業研究では、歯科医療技術者の視点でアメフトでも使えるようなスポーツマウスガードを作ってみたいと考えています。これから実習を通じて技術を磨いていきます」